

經濟論叢

第148巻 第4・5・6号

哀 辞

故 堀江保蔵名誉教授遺影および略歴

G・マリーンズの外国為替論(1).....	本 山 美 彦	1
19世紀末ドイツ電機工業における労働能率増進策(4).....	今久保 幸 生	22
スコットランド坑夫繫縛制変遷概観(2).....	加 藤 一 弘	48
アメリカ鉄鋼資本の多角的事業展開と 日米合併企業の位置づけ(2).....	石 川 康 宏	70
低開発国におけるドラーリゼイション(dolarization).....	安 原 毅	87
持続的インフレーションと政府.....	国 宗 浩 三	104
時間選好に関する基礎的な考察.....	依 田 高 典	122
短期調整過程の二類型(1).....	森 岡 真 史	140
追加償却会計と取替原価償却会計.....	藤 井 深	162

研究ノート

FASB 1976年討議資料に関する研究ノート	藤 井 秀 樹	181
-------------------------------	---------	-----

追 憶 文

堀江保蔵先生を偲んで.....	角 山 榮	190
堀江保蔵先生を偲ぶ.....	山 本 有 造	195

学会記事・經濟論叢 第147巻・第148巻 総目録

平成 3 年10・11・12月

京 都 大 學 經 濟 學 會

G・マリーンズの外国為替論（1）

本 山 美 彦

は じ め に

16世紀，17世紀前半におけるイングランドの外国為替手形は，送金手形の形式を取っていても，融通手形の側面の方が強かった。これは，徴利禁止の法の目をかい潜るためであったことは，歴史学では常識になっている。しかし，基本的なことはなにも分かっていないのではないだろうか。イングランドからの絶えざる正貨流出を，イングランド側の為替の不当な低さに求める初期のイギリス重商主義者たちの主張が，現実を正しく反映していたものとすれば，利子を隠すための外国為替手形の引き受け業務において，イングランド側の為替レートが大陸側のそれに比して，つねに高く設定されていなければならない，という理屈との間に大きな格差が生じてしまうからである。少なくとも，イギリスの初期重商主義者たちは，融通手形と送金手形とのズレがもたらす深刻な問題に気づいていた。融通手形という側面から見れば，イングランドの為替は不当に高く，送金手形という側面から見れば不当に低い。この相反する局面の同時存在の謎こそが，彼らがこだわったものであり，こうした不可解な局面を操るところに，外国銀行の為替操作性を嗅ぎとっていたのである。一見，混乱に混乱を重ねる初期重商主義者たちの理論は，不可解な局面を解消するために，自国金融市場の整備，自国貿易商人と銀行家の育成，さらに，スターリングの国際通貨化，通貨当局による内外為替市場への介入，という点に集約されるものである。本稿は，この局面に接近しようとするものである。

マリーンズを初めとして，17世紀のイギリス初期重商主義者たちが，金融基盤の整備に大きな関心を寄せたのは，この時代の商業部門における貨幣需要の

増大を反映したものであった。にもかかわらず、当時のイングランドは、激しい正貨流出に見舞われていた。17世紀初期のヨーロッパにおいて、外国通貨の使用と受け取りとを制限する唯一の国がイングランドであったという事情が、正金流出を引き起こした理由である。たとえば、オランダでは、ヨーロッパで馴染みのあるほとんどの通貨の国内使用が認められていた。ドイツのグルデン (gulden)、スペインのデュカット (ducat)、イングランドのソブリン (sovereign)、フランスのクラウン (crown)、等々、1,000種もの铸貨が流通していたという (Shaw, *The History of Currency, 1252 to 1894*, 1896, p. 78)。

イングランドがこのような措置を取ったのは、外国の貨幣混乱から自国貨幣市場を隔離することにあった。しかし、これは、商業取引に重大な障害をもたらすものであった。外国では、貿易の決済にイングランドの铸貨を利用できるのに、イングランド側においては、外国通貨を貿易決済に使用できないことは、外国人がイングランドとの貿易に対して、消極的になることを意味する。つまり、フランス人が自国通貨のエキュ (écu) をロンドンに送るには、ロンドンでイングランドの貨幣に铸造し直さなければならなくなり、それだけ、コストが高くなってしまふ。いきおい、イングランドの铸貨は、ロンドンへの送金用に、内在価値よりも高い価格で求められることになる (Muchmore, 1969, p. 350)。

こうして、イングランドからの正貨流出が促進されるが、外国の正貨流入については、イングランド側で余計な铸造費用がかかるために阻止される。このメカニズムが存在するかぎり、イングランドの貿易が大きくなればなるほど、イングランドの正貨はますます大量に流出するようになる。この流出圧力がどの程度のものかを計量する尺度はないが、イングランドの正貨が、貿易決済に使用される度合いに応じて流出したことは確かであった。重商主義の論者たちは、この事実の解明に腐心していたのである。

貨幣現象に敏感に反応していたイギリス初期重商主義者たちにとって、貨幣の対外価値が、なぜ地金価値から外れて通用してしまうのかといったことが、

基本的な謎であった。後の古典学派に比べれば、はるかに精緻な貨幣論を彼らがもちえたのも、この疑問にこだわっていたからであった。そこで、本稿では、イギリス初期重商主義者の1人、G・マリーンズの外国為替論を検討することにする¹⁾。マリーンズの経歴と著作については、L・マッチモアの研究 (*ibid.*) に全面的に依拠している。

I マリーンズの勢力説的傾向

マリーンズ思想は、これまでそれほど注目されてきたわけではなかった。思想自体が一貫したものではなかった上に、貿易差額論として見ようとすれば、トーマス・マンに較べて、あまりにも見劣りしていたからである。しかし、商業取り引きの根幹にはバーゲイニング・パワーがあるということを、マリーンズは当時の論者として、もっとも強く意識しており、この側面から彼の為替レート論を見直せば、為替市場論に新たな光が与えられる、と思われる。

マリーンズは、初期の思想家の中でも際だって多作な人であった²⁾。しかも、そこには17世紀初期の経済に関する正確な認識があった。彼は国王の経済顧問であったし、1600年から1620年の間に、他のどの商人たちよりも多くの請願を枢密院に提出していた。この請願の多くは、British Museum の Additional Manuscripts に集積されている the Caesar papers に見られる。疑いなくマリーンズは、ジェームズ I 世 (James I) の時代 (Jacobean years) の最大の経済政策家であった (Muchmore, 1969, p. 337)。

1) 17世紀イギリス経済思想は、国民的力を結集することを目指し、政策、思想、事実関係が渾然一体となった重商主義の教義に集約されるものである、と説明されてきた (Coats, 1957, pp. 174-76)。しかし、近年では、このようにすべてを重商主義の教義に押し込める考え方に対して、疑問が出されている (Hinton, 1955, p. 284; Supple, 1957, p. 251)。それでも、依然として初期重商主義思想に、経済的実践性を見ようとする論者たちと (Supple; Hinton; Wilson など)、経済現象から離れた教義のみを強調するだけであったと否定的に理解する論者たち (Heckscher; Coats など) の間の論争の決着はまだついていない。しかし、私は、貨幣管理のあり方に腐心した思潮のかたまりが重商主義だと考えている。

2) ただし、印刷されたパンフレットは5つにすぎず、その版自体もそれぞれが6つ以上ある (Muchmore, 1969, p. 336) というように、オリジナルの印刷物を見極めることが非常に難しいということも、マリーンズが無視されてきた1つの理由であろう。

マリーンズの考え方のもっとも重要な点は、外国貿易が自国の力の強い特定の団体によって独占的に営まれるべきである、というものであった。この考え方は当時でもすでに旧くさいものであった。イングランドでも、商業取引が十分に増大していて、市場が需給関係を反映して動くものになっていたことは、多くの商人たちの常識であったからである。このために、多くの学説史家はマリーンズを近代市場の機能を理解できない中世の公正価格信奉者として描いてきた（たとえば、Johnson, 1933, pp. 442, 446n., 454）。しかし、旧くさいこの考え方も、マリーンズ自身の体験と、イングランドが置かれていた当時の状況とを合わせて考慮に入れば、けっして陳腐な考え方ではなく、むしろ、市場のもつ重要な側面でありながら、古典派的思潮がともすれば見過ごしがちな力関係を強調したという点で、非常に新鮮なものであることが理解されるだろう。

マリーンズを有名にしたのは、1592年に悪徳金融家として悪名を馳せていたパラヴィチーノ卿（Sir Horatio Palavicino）がらみの訴訟事件である。当時、マリーンズは、パートナーのヴェルマイデン（Vermayden）とともに、由緒あるアントワープ商人のホンガー（Hans Honger）の代理人であった。マリーンズは、イギリスが拿捕したスペイン船（Madre de Dios）の積み荷を£28,065で買収するように、ホンガーからの依頼を受けたが、このときの彼にはイギリス王室とのコネクションがまったくなく、パラヴィチーノに仲介を乞うことになった。しかし、ホンガーがマリーンズに£28,065を預けたのに、ホンガーの手に実際に渡った品物は£20,000分に過ぎず、残りの£8,000の回収をすべく、ホンガーはマリーンズを訴えた。法廷でマリーンズは、パラヴィチーノやイングランドの役人にカネを支払ったことを主張したのだが、その弁明は入れられず、着服の罪に問われて拘禁されてしまった（Stone, 1956, p. 224.）。さらに、数々の証言によって、彼の商売上のいくつかの疑惑点が問題にされた。たとえば、エセックス卿（Lord Essex）に出されたイングランドのある船主の訴えでは、マリーンズに輸送を委託した積み荷を、マリーンズが、スペイン戦争で自

分達に与えられた報奨であるとして着服したとされた (Salisbury, 6, 16)。さらに、彼が、ウォルシンガム (Secretary Walsingham) というスパイのネットワークの一員であったことが発覚している (Salisbury, 6, 455-56)。マリーンズの義弟も、シェール (Shere) という名の債権者から返済の遅れを訴えられて、逮捕されてもいる (Acts of the Privy Council, 365)。

拿捕された外国船の積み荷の売買という商人稼業の経験から、マリーンズは、あらゆる市場取り引きが力関係で支配されることを骨の髄から身に浸み込ませたのだろう。彼の初期の著作は、イングランドの国際的バーゲイニング・パワーの弱さが、イングランドの苦境の真の原因であるという主張に集約される。彼の初期の著作は、そのほとんどが、外国の金融業者に対する非難で満ちている³⁾。市場の為替レート決定のあり方は、当時の教会関係者からの疑惑的であり、他人の利益をつねに損なうような役割が貨幣に特別に与えられているのではないか、というのが神学者たちの考え方であった (Milles, 1604, 序文)。為替レートの不安定さが国内価格の上昇をもたらし、そのことが、イングランドの铸貨を流出させる原因になっているのではないのか、というのがイングランドの教会の一般的認識であった (*ibid.*, p. 10)。

マリーンズは、教会の考え方を支持した。それは、彼が反商人的な立場にあったからでなく、反大陸商人の立場を、イングランドの商人として強く意識していたからである。彼は、教会を支持すべく、(1) 為替レートが正貨流出の原因となる、(2) 国内通貨供給減少が国内経済に悪影響をおよぼす、(3) 為替レートは固定されるべきである、という3つの論点を提起した。その見解は必ずしも首尾一貫したものではなかったが、イングランドに不利な大陸の外国為替市場のあり方が、イングランドからの正貨流出をもたらせているとの見解は鮮明であった。たとえば、*Lex Mercatoria*, 3rd ed. では、つぎの主張が見られる。

3) the Cotton Collection at the British Museum に手稿のまま保存されている。一部焼失しているが、ほとんどは、16世紀の最後の10年間にエリザベス女王三に宛てたものである (British Museum, Cotton MS Otho. E. 10, fols. 64-79)。

「為替のみが能動的なものであり、商品も貨幣もそれに対して受動的なものであるように、為替は作り出されている」(p. 45)⁴⁾。

II マリーンの外国為替市場認識

16・17世紀では、正貨流出は貿易の逆調によって引き起こされるというのが、一般的な考え方であった。マリーンズもまたこの考え方を受け継ぐが、彼は一歩踏み込んで、この逆調がなぜ生じるのかを問うた。彼は、イングランドの交易条件が悪いため、イングランド商人が外国の商品を入手するのに、自国商品の提供だけでは足りず、貨幣を出さなければならないという不利さを非難した (*The Canker*, 1601, pp. 15-16)。イングランドの商品の交易条件が悪いのは、悪徳外国銀行家が外国為替市場を牛耳っているせいであると主張したのである。

「銀行家たちは、為替の一般的な流れを押さええていて、まさにわがイングランドの為替をも支配している。彼らはロンドンで £100. st. を入手するために、ミドルボロー (Middleborough) で £165. fl. (Flemish) を支払う。つまり、£1. st. が、彼らの貨幣で 33s. (Flemish) に相当する。また、£1. st. は、イングランドの貨幣で 20s. であるが、このスターリングの引き渡しは1か月後である。そして、ロンドンで受け取られた £100. st. が、再度フレミッシュに替えられるときには、£1. st. が 35s. 6d. fl., ないしは、36d. fl. になる。これも、受け渡しは1か月後である。そこで、ミドルボローで £177. 10s. fl., ないしは、£180. fl. が支払われる。結局、2か月で 33s. fl. につき、3s. fl. の差が生じる。つまり、£100. fl. につき、2か月で £0. fl., 1年で £50. fl. もの利益が得られる。ハムボロー (Hamborough), エムデン (Emden), その他の地区でも同じようなことが行われている。時間格差と距離の存在によって、貨幣が豊富になったり稀少になったりするし、

4) ちなみに、マリーンズの著作の中で、理論的に優れたものは、この *Lex Mercatoria* ではなく、*The Canker of England's Commonwealth* (1601) である、とされている。

このような、貨幣価値の高低が、銀行家たちに利益をもたらすのである」
(*The Canker*, pp. 31-32)。

ここで注意されなければならないことは、銀行家による為替の支配というとき、マリーンズの念頭にあったのは、為替レートの絶対水準が支配されているということではなく、地域、時間によるレート格差のみを彼らが支配しているという理解である。すでに当時でも、為替手形の価格は種々の手数料の合計であることが理解されていたからである。たとえば、外国貨幣の請求権、実際の受け渡しが行われるまでの間の資金運用を行う権利、等々が、手形の価格を形成するという点は、1564年のイングランドでも指摘されていた (Milles, pp. 5-6)。マリーンズは、銀行家がこれら手数料を一方的に決定できる力を持っているからこそ、時間的、地域的レート格差を操作できると見なしていたのである。

16・17世紀の外国為替は、イタリア、スペイン、フランスの銀行家の独占下にあった。彼らは、金融中心地で定期的な会合を開いていた。ここで、各地の為替レートの取り決めが行われていたのである (Roberts, 1638, p. 35)。これが、マリーンズには陰謀の証拠と映ったのである。彼は言う。もし、スターリング為替が平価以下であったとすれば、外国への支払いをしなければならないイングランドの商人は、ロンドンにある為替銀行にポンド・スターリングを支払って、外国為替手形を購入するよりも、正貨を直接外国に搬出する道を選ぶであろうし、低い為替レートがこのような生貨搬出を促すことになるだろう、と (*The Canker*, p. 34)。

実際に、為替取り組みか正貨現送かを選択するには、為替レート以外に正貨現送費用、鑄造費用などを考慮しなければならないはずであるが、それに対する言及はマリーンズにはない。しかし、それ以外の点においては、マリーンズの低為替・正貨現送論は、後世の正貨移動メカニズム論とよく似ている。低為替は、外国で販売した商品のスターリング建て収入が増大するというメリット

があるではないかとの批判を予期して、マリーンズは論じている。確かに、外国市場で自国製品を売ったイングランド商人は、ロンドンに送金するさいに、低為替の下ではより多くのスターリングを入手できる可能性がある。しかし、外国の市場で低為替のロンドン宛て手形を販売してくれる銀行家などはいないだろう。より多くのスターリングを入手して、より少ないフレミッシュ貨を販売するところに利益を見出すかぎり、銀行家たちは、より少ないフレミッシュ貨を入手してより多くのスターリング貨を販売するような逆の操作は行わない、とマリーンズは考えたのである。こうして、ロンドン為替が低落すれば、外国におけるロンドン為替市場は消えてしまうだろう、とマリーンズは言う (*The Canker*, p. 49-50)。つまり、マリーンズは、為替レートが為替の需給関係を反映せず、もっぱら、外国銀行家によって操作されたものであることを強く意識していたのである。マリーンズのこの着眼点は重要である。ロンドン為替が、取り組まれるのは、それが高いときのみであるが、これは外国銀行によって、ロンドンではスターリング貨の、アントワープではフレミッシュ貨の貸し付けが銀行側に有利になるからである。逆にロンドン為替が低いときには、ロンドンでのスターリング貨貸し付けは停止され、ロンドンからアントワープへの純送金為替のみが取り扱われることになるからである。つまり、為替取り組みは、貿易に対して中立であるわけではない。両替を基本とする外国銀行の手に為替取り扱い業務が握られているかぎり、イングランドの貿易には重大な支障が生じる、ということにマリーンズは気づいていたのである。

抽象的には、為替レートは為替手形の売買によって決定されるはずである。外国でのスターリングのレートは、その地でのスターリング手形の需給関係で決まるし、ロンドンにおいては、フレミッシュ建て手形の需給関係で決まるはずであるが、実際にはそうになっていず、レートはつねに、外国銀行に利益が上がるように設定されているというのである (*The Canker*, p. 33)。イングランドの貿易事情に従う為替手形制度の樹立、これが、マリーンズの悲願だったのである。

マリーンズは、低為替がイングランドの輸出増進につながるという点も否定する。これは、当時のイングランドの輸出構造と関係している。エリザベス時代のイングランドの輸出製品の大半は綿の半製品であって、価格に関しては非弾力的な海外需要に制約されていた (Gould, 1955, pp. 128-29)。したがって、輸出増進効果がなければ、低為替は、そのまま、イングランドの貿易収支赤字を増幅するものであった。この点でも、マリーンズの主張は、当時の情勢を反映したものであった⁵⁾。

III 貨幣管理の必要性認識

テューダー朝、ステュアート朝初期のイングランドの金融組織は、大陸に比べて大幅に見劣りするものであった。貨幣は、代替的信用手段に恵まれず、正貨に限定されたものであった。このような背景から、貨幣供給の増大こそが経済成長を促すというマリーンズの主張が出てくる。

「豊富な貨幣を王国にもってきて、さらに流出しようとする貨幣を王国内

5) ところが、*The Canker* には別の主張も混在している。低為替が貿易収支赤字を増幅するといった上記の主張とはまったく逆に、高為替が貿易収支赤字を生み出すという主張も見られるのである (*The Canker*, pp. 40-42)。今度は、高為替が輸出を停滞させるという、イングランドの輸出品に対する外国の需要が価格弾力的であると見なしてしまう。この完全に相反する主張は、後になると、後者に収斂していく。イングランドが高為替になり、外国の銀行が低為替操作をしていると非難することができなくなったのである。さらに、マリーンズの主張にはいくつかの奇妙な論理も見られる。正貨移動論を展開しながらも、それが、「貨幣の忍耐」(toleration of Money)によって妨げられるという論点がそれである。低為替によって流出したイングランドの貨幣は、大陸の貨幣を増大させ、イングランドの物価を下げ、大陸の物価を上げる。また、輸入品価格は直ちに国内物価と連動するので、大陸の物価上昇とともにイングランドの輸出品も価格が上がる。これは、イングランドの交易条件の改善を意味して、正貨流出が逆転するというのである。この正貨移動論は後のヒュームのそれとは著しく異なっている。ヒュームでは、インフレーションを起こした国の輸入物価が相対的に安くなり、輸入が増大することによって、貿易の逆調が生じて、正貨流出が起こるという論理になっているが、マリーンズでは、インフレーションを起こした国に輸出する国の輸出品価格が上昇することによって、この輸出国側に正貨が流入するというのである。つまり、マリーンズにおける輸出価格は、輸出国側の国内物価水準と関係なく、輸出される地域の物価に収斂するとの前提があった。この前提は、当時の論者に共通していた。物価は、供給側の条件と無関係に需要側の事情によって決定されるというのである。この論理は、しかし、言われているほど陳腐なものとは思われない。今日の日米貿易摩擦には、マリーンズの想定する論理が当てはまるからである。

にとどめることによって、……わが国の商品価格が上昇し、それによって商品の生産が増大し、わが国内商品の生産に携わる人々だけではなく、輸入商品に携わる人々にも影響を与えて、王国内を強固に、堅実なものにするのである」(*The Canker*, p. 94)。

マリーンズは貨幣供給を増大させるべく、貿易差額の黒字と自国の銀行組織の整備を訴え、それを推進する機関の設立に奔走した。1611年にA・ジョージ(Arthur Gorges)とW・コープ(Walter Cope)に与えられた特許会社、「一般通商登録所」(the Public Register of General Commerce)は、このマリーンズの請願に基づいたものである(British Museum, Additional MS 10038, fol. 11)。イングランド国内の不完全な金融組織は、もっと完全な全国を覆う代理店のネット・ワークに取り替えられねばならない。その代理店は投資できる貨幣を豊富にもつ人々によって経営されなければならない(Arthur Gorges, 1611, p. 38), とマリーンズは、市場に影響を与えることのできる強力な機関の設立を要望したのである。

彼は裏書きによって流通する約束手形の役割を増大させるべきだとも考えていた。このことによって、正貨流出による貨幣量減少の悪影響を相殺しようとしたのである(*Maintenance of Free Trade*, pp. 23-24)。

初期マリーンズは、国王の銀行家(Royal Exchanger)が王室の意を受けて為替市場に介入するべきであるとも考えていた(British Museum, Cotton MS Otho. E. 10, fol. 77)。国際市場で為替を平価水準に維持するために、為替平衡勘定を設定するという案は、マリーンズのオリジナルなものではなく、グreshamの発案であるが(de Roover, *Gresham on Foreign Exchange*, 1949, p. 218), しかし、このマリーンズ案は、通商の要の位置に立つことによって独占的な利益を貪ろうとする、自己の私的利益に奉仕するためのものであるという非難にさらされた。マリーンズ自身は、その非難に対して譲歩し、平価以下の為替レートの禁止法令で十分であると、自己の論理を修正している(Eng-

lands' View, p. 193)。高為替政策によって、正貨流出を阻止し、物価下落の阻止、景気停滞の防止ができると考えたのである。マリーンズの時代の人々は、自国の製品を外国製品よりも高く売り、外国製品を安く買うことを国家的利益と考えていたようである（“Treatise of Tripartite Exchange”, British Museum, Harl. MS. 513, fol. 25b)。

1564年以降、イングランドでは為替問題の委員会が不定期に開かれるようになっていた。1615年には、一向に改善しない低為替状態に焦った国王が、ウォルステンホルム (Wolstenholm) と克蘭フィールド (Cranfield) に貿易収支の算定を命じている。これが、有名なコッカイェーン聴聞会 (Cockayne hearings) である (Dietz, 1932, pp. 144-81)。危機感を抱くジェームズ I 世 (James I) は、商人に種々の献策を求めた。マリーンズもその一人であった。

IV ミッセルデンとの論争

1622年に、E・ミッセルデン (Edward Misselden) が、*Free Trade, or the Means to Make Trade Flourish* を著した。それは、深刻な経済停滞に苦しんでいた1620年代に向けての処方箋を意図したものであった。経済停滞の原因を貨幣不足に見た点は、マリーンズと同じであるが、正貨流出の理由をイングランドの铸貨が外国で過高評価を受けていたことに求めていた点に大きな違いがある (Misselden, 1622, p. 8-9)。つまり、スターリング為替のレートではなくて、イングランドの铸貨の評価に正貨流出の根拠を求めたのである。イングランドの铸貨が海外流出するのは、イングランドの铸貨が外国で高く評価されているからであるとする論点は、低為替のゆえに正貨が流出するというマリーンズの論理とは大きく異なる。当然、マリーンズは、為替レートを媒介させずに、自国貨幣が外国で高く評価されているか否かを判定することはできないのではないかと反論した (Malynes, *Maintenance of Free Trade*, p. 63)。イングランドの正貨を海外に輸送する商人は、その行為から利益を得るのであるが、彼らの利益は、イングランドの铸貨を提供することによって得られる外

国通貨と、イングランドへの請求権を売ることによって得られる外国通貨との差額に存在する。イングランドの鋳貨が海外で過高評価されることも、イングランドの為替が低く評価されることも、ともに同じ過程の表現である、とマリーンズは反論したのである。

正貨流出のもう1つの理由は、当時、安定的な決済手段が不足していたことである。17世紀のアントワープ市場の状況について、H・バックレー (H. Buckley) はつぎのように推測している。

「悪貨が横行していたために、フランダース人たちは各国鋳貨の公的な価値評価を導入し、それぞれの鋳貨を「公認の」(Permission), ないしは、「評価された」(Valued) 貨幣で価値評価していた。為替手形の決済にしろ貸借の精算にしろ、このような公認の貨幣を使用するというのが習慣になっていた。公認の貨幣とは、3分の2が金、3分の1が銀からなるものであった。したがって、この貨幣は4分の1パーセントから2パーセントのプレミアがつき、経済停滞時にはもっと高いプレミアがついていた」(Buckley, 1924, p. 590)。

各国の鋳貨の内在価値が悪くなる一方であったときに、イングランドの鋳貨だけはエリザベス時代の良貨への改鋳によって、広く受け入れられたのである。とくに、三十年戦争時には、イングランドの鋳貨はもっとも信頼された国際通貨だった。16世紀の国際通貨がスペイン・リアル (real) であったのと同じように、17世紀の国際通貨はイングランドのスターリングが担ったのである。R・ヴォーガン (Rice Vaughan) の証言によれば、法令では、フランスの鋳貨の方がより多くの純分を含んでいるとされていたにもかかわらず、1607年と1608年に、ジェームズI世時代のイングランドの鋳貨は、フランスでは、3フランス・クラウン (crown) ほど高い価値づけを受けていた。1621年と1622年には、イングランドの鋳貨はオランダでも過高評価されていた。1622年の秋には、フランクフォート (Frankfort) ではイングランドのシリング貨が過高

評価されていたために、フランクフォートからドルを、オランダからライダー (rider) を、フランスからフランス・フランをもち出して、イングランドの鋳貨に鋳直すことによって利益があがった (Vaughan, 1675, p. 49)。

あるいは、外国貨幣の評価の上昇ほど、外国商品の価格が上昇しないときには、貿易収支が悪化するし、鋳貨価値の変化が直ちに不完全な外国為替市場に波及しないところから、各国の正貨が投機の対象になるなどして、当時の各国の正貨は、どの国のものであれ、投機現象による流出入を繰り返していたのである。

マリーンズは、イングランドの鋳貨価値が上がったのだから、外国でのイングランド商品の価格もそれに応じて上昇するはずのものであると信じていた。しかし、実際にそのようなにならないのは、低為替レートという外国銀行の悪しき操作によるものと考えたのである (Malynes, *Maintenance*, p. 14)⁶⁾。

1623年の *The Center of the Circle of Commerce* になると、マリーンズの論調は、これまでの為替問題一辺倒から、貿易差額説に傾いた。このパンフレットは、貿易停滞の原因を探るマンデヴィル (Mandeville) 卿を中心とした王立委員会での意見をまとめたものである。これは、6人委員会と呼ばれ、マリーンズとともにトーマス・マンもメンバーであった。この委員会の最終的な覚書きとはつぎのものであった。

「それゆえに、この王国の商品が海外で十分に売れ、そこでの販売収益の総額が、この国における外国商品の消費額の合計を上回るか、見合うようになるまでは、不用な外国商品への浪費的で不適切な出費を、しかるべき方法で削減する以外には、鋳貨輸出を阻止する手段は出てこないし、外国からの

6) ただし、マリーンズのこの考え方は、当時の商人の一般的な認識ではなかった。むしろ、多くの商人は、イングランドの綿製品が売れないのは、海外のものよりも割高な価格であるためである、という見解をもっていた (British Museum, Lans. MS 152, fols. 229-30b; Lans. MS 487, fol. 146b)。しかし、マリーンズはこの考え方を退ける (Malynes, *Maintenance*, pp. 40-47)。マリーンズは、低為替によるものであれ、イングランド商品の海外における低価格こそがイングランド商人の輸出意欲を殺ぐものであるとした。

輸入品を獲得する手段も出てこないだろう。もしも、外国商品への支出が、外国の港で捌ける我々の商品価値の範囲にとどまってくれば、たとえ、近隣諸国がわが鑄貨価値を高めたとしても、それを取り引きする商人を喜ばせるような為替が横行したとしても、あるいは鑄貨輸出と、外国人が我が国の鑄貨を保有することを禁じた法律が機能しないとしても、実際、すべての人が、自らの意思に関わりなく、貨幣入手に困難を覚えてきたのであるが、わが商品輸出の方が上回るという事情が、自然の成り行きとして、あらゆる抵抗を退けて、鑄貨を再度増大させることになるだろう。それ以外の救済策はまったく効果のないものであると我々は認識する。これが実現すれば、他のすべての政策は必要なく、無意味である」(British Museum, Additional MS 34324, fols. 156b-57)。

この覚書きは、1623年5月に、マンデヴィル卿が書いた論文への回答の形を取ったものである。マンデヴィルの見解は、交易条件が突如悪化したのは、為替が不法に操作されたからであるという非難を含むものであった(British Museum, Additional MS 34324, fols. 153-54b)。この論文での「救済」という言葉の使い方が、マリーンズの *Maintenance of Free Trade* と同じであることから見れば、マリーンズは、このマンデヴィルのグループにおける指導的な存在であったらしい(Muchmore, 1969, p. 353)。

しかし、不況が長引くにつれて、為替主犯説と貿易差額説との双方は頑固な対立点を際立たせること以上に展開できなかった。両者はけっして交わることがなかったのである。

ただし、マンの議論は、為替レートの人為性を主張する理論の批判に性急なあまり、すべてを貿易差額に求めすぎた。彼は、資本移動も国際貸借をも無視し、国内貨幣供給に重大な影響をもたらす金貨、銀貨の移動の仕方にも注意を振り向けなかった。当時、金貨は価値が高すぎて一般の取り引きには使用されていず、金貨流入はあったものの、イングランドの銀貨が大量に海外に流出す

ることによって、国内での交換手段の深刻な不足がもたらされていて (Vaughan, in McCulloch, p. 82), このような貨幣事情が、貿易に深刻な影響をもたらしていた (Muchmore, 1969, p. 354)。

マリーンズは、依然として、この貿易差額論一辺倒の説に抵抗していた。マリーンズによれば、差額説の不十分さは2つある。まず、関税を逃れる不法な貿易が横行している状況下では、輸出入額を正確に把握することは不可能である。さらに、貿易が不定期に行われるので、特定の期間を区切った貿易差額を求めることも無意味である。たとえば、東インド会社の船の積み荷は莫大な額であるので、その船が入港するか、出港するかによって、貿易差額は大きく激変してしまう、というのである (Malynes, *The Center*, p. 70)。

貿易外収支の要素も大きい。1623年の4月に、マリーンズの取り巻きの1人のR・マディソン (Ralph Maddison) が貿易外収支の13項目を枢密院に提出している。イングランドが外国人に支払わなければならない利子、為替の手数料支払い、保険料支出、貨幣支払いの遅延分、等々が、そこには列挙されていた (British Museum, Additional MS 30324, fol. 173)。これらの実際の額がどの程度であったのかは、知る由もないが、かなり大きかったことだけは確かである。これらを除外した貿易差額論はその意味においても無意味であろう。

しかし、貿易差額の算定が困難だからといって、貿易差額重視論の価値がまったくなくなるわけではない。マリーンズ自身も、その概念の重要性を否定していたわけではない。

「オーバervalance (支払い超過) という事態の存在は、我々も承認する。この事実は種々の原因を取り除くことによって、救済されなければならないものである。しかし、これは、貿易差額を研究することによってなされるものではない。貿易差額は、不確かであり、真実をほとんど表現していない。それはただ想像の世界のものであり、独断である」 (Malynes, *The Center*, p. 60)。

貿易差額説が問題のありかを指摘したのは確かであるが、その力点は、輸入を減らし、輸出を増大するといったことを表明するだけのことにしかなかった。それは、原因を取り除くことなく、症状を除去することを問うことと同じである、とマリーンズは批判したのである。

「貨幣は、それをもち込むことによって損失が生じるときには、輸入されないだろう。そして、商品がもち込まれば、いわゆる支払い超過（オーバーバランス）が増加することになる。このことが、貿易の大きさへの錯覚を与えて、真実を見えなくさせる。ここに、あなた方の差額説の誤りと判断の不確かさとがあるということを、しっかりと認識しなければならない。それは、東に向かって走っている人を説得して、西に向きを変えさせるという以上のものではなく、走っていることに変わりはない類いの希望のない救済策である」(Malynes, *The Center*, p. 57)。

貿易差額の大きさと関わりなく貨幣が流出するのは、そのことによって利益が得られるからである、とマリーンズは主張する。為替市場においてスターリングが過少評価されているかぎり、正貨流出は継続する。輸出額は正貨流出と無関係である。たとえば、輸出額が増大しても、

「そのことが、支払い超過を軽減するようなことはない。すべての人が主張するように、言われるところの製品の販売収益は、外国商品になってもち帰られる。なぜなら、貨幣や地金をもち帰ることは、現状況下では損になるからである」(Malynes, *The Center*, pp. 57-58)。

もちろん、正貨流出は種々の原因が相互に関連して生じたはずであるが、マリーンズはそれらの関連性を否定して、ただ為替市場の論理のみで正貨流出を判定した。後期の *The Center of the Circle* においてすら、マリーンズは為替レート of 短期的な変動が、貨幣の多寡、貨幣需要の多寡によって決まると考えていたが (Malynes, *ibid.*, p. 14), 依然として、この貨幣需給と輸出との関

係を見ようとはしなかった。E・ジョンソン (E. A. J. Johnson) が、マリーンズをドグマティストと決めつけたのも、この側面を見たからである (Johnson, 1937, p. 41)。

平価による為替レート決定というマリーンズの主張は、後に正貨流出を防ぐ現実の政策となった。1624-25年の貨幣の大鑄造によって、イングランドの鑄貨が大量流出するようになるや、為替業者の公認問題がクローズアップされたからである。1627年にオランダの貴族のH・リッパ (Henry Rich) が、この地位を国王によって与えられた。これは、国王の定めるレート以外では地金や外国鑄貨の売買をしてはならず、その取り引きは公認為替業者に限るというものであった (Rymer's Foedera)。しかし、支払い超過時に為替レートを固定することに、かえって、正貨流出を促進させてしまった。為替手形を取り組むよりも、地金や外国鑄貨を送金する方が安くついたからである。

たとえ、正貨取り扱い業者に独占権を与えたとしても、地金やイングランド鑄貨の海外輸出を禁じたことで、地金輸出の必要性がなくなったわけではない。この業者自身が地金輸出の請願をつぎのように出したのである。

「為替業者は、自己の在庫分としても、送金手形の買い取り資金としても、この地に海外支払い用の資金を集積していなければなりません。そこで、為替業者としましては、為替の支払いのみに必要な貨幣を海外に輸出できるようなお取り計らいをお願いします。貨幣を輸出しましても、為替業者には利益はありません。ただ必要だからこそ、貨幣を輸出するのにすぎないのです」 (Charles I, 64/57)⁷⁾。

1621年と1622年の凶作によって、地金が激しく流出するようになると、金属貨幣の着実な供給を前提にして成立していた当時の単純な経済は深刻な影響を

7) 17世紀の両替業務は、どの国においても認可制であった。イングランドではそれは、Royal Exchanger によって営まれ、個人の両替商は存在しなかった。

受けてしまったのである (Supple, *Commercial Crisis*, p. 162)⁸⁾。そこで、正貨を輸入すべきであるという、古典学派の枠組みからすれば不合理なマリーンズの主張点が出てくることになる。

引用文献

- [1] *Acts of the Prixy Council*, 2nd ser., 30.
- [2] Antwerp, Belgium, Municipal Archives. Insolvente Boedelskamer: Nos. 446, 790. Bills of Exchange.
- [3] Beawes, Wyndham, *Lex Mercatoria Rediviva or the Merchant's Directory*, 3d ed., London, 1771.
- [4] Beer, M., *Early British Economics from the XIIIth to the Middle of the XVIIIth Century*, London: George Allen and Unwin, 1938.
- [5] Bloch, M., *Esquisse d'une histoire monétaire de l'Europe*, Cahiers des Annales, 9, Paris: Lib. Armand Colin, 1954.
- [6] Brenner, Y. S., "The Inflation of Prices in England, 1552-1650", *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. 15.
- [7] British Museum, Cotton MS Otho. E. 10.; Additional MS 10038.
- [8] Buckley, H., "Sir Thomas Gresham and the Foreign Exchanges", *Economic Journal*, Vol. 34, 1924.
- [9] *Calander of State Papers*, 1641-1643.
- [10] Cipolla, C. M., *Money, Prices and Civilization in the Mediterranean World: Fifth to Seventeenth Century*, New York: Gordian Press, 1967.
- [11] Coats, A. W., "In Defense of Heckscher and the Idea of Mercantilism", *Scandinavian Economic History Review*, Vol. 5, 1957.
- [12] Coleman, D. C., "Eli Heckscher and the Idea of Mercantilism", *Scandinavian Economic History Review*, Vol. 5, 1957.

8) 悪鋳による価値変動はあまりにも激しく「貨幣全体を貫く糸」(Mark Bloch, *Esquisse d'une histoire monétaire de l'Europe*, Armand Colin, 1954, p. 50)であった。しかし、地金を忌避することはできなかった。理由は、権力が鋳造権による利益を得ていたことと、社会心理がまだ金属退蔵に傾斜をしていたからである。「もし、地金がなければ、ヨーロッパでは通貨に対する社会的信用が失墜してしまったであろう」(Wallerstein, *The Modern World-System*, 1974.; 川北稔訳, 『近代世界システム』, 岩波現代選書, I, 49ページ)。

金属貨幣が象徴貨幣になる鍵は、品物としての硬貨の価値がその額面価値よりも小さくなれるかどうかにかかっている。C. チポラによれば、小額紙幣でこのようなことが生じたのは、イギリスでもやっと1816年合衆国で1853年になってからである (Carlo Cipolla, *Money, Prices and Civilization*, 1967, p. 27)。

- [13] de Roover, R., *Gresham on Foreign Exchange*, Cambridge, 1949.
- [14] de Roover, R., *Money, Banking and Credit in Mediaeval Bruges*, Cambridge, Mass.: The Mediaeval Academy of America, 1948.
- [15] D'Ewes, S., *The Journals of All the Parliaments During the Reign of Queen Elizabeth*, London, 1682.
- [16] Dietz, F., *English Public Finance, 1558-1641*, New York, 1932.
- [17] *Encyclopaedia of the Social Sciences*, III, "Burlamachi, Philip", New York, 1935.
- [18] Feavearyear, A. E., *The Pound Sterling; A History of English Money*, Oxford: Clarendon Press, 1931.; 邦訳, 一ノ瀬篤・川合研・中島将隆訳, 『ポンド・スターリング…イギリス貨幣史』, 新評論, 1982年。
- [19] Geoges, Sir Arthur, *A True Transcript and Publication of His Majesties Letters Patent for an Office to be Erected*, London, 1611.
- [20] Gould, J. D., "The Trade Crisis of the Early 1620's and English Thought", *Journal of Economic History*, Vol. 15, 1955.
- [21] Gould, J. D., "The Date of England's Treasure by Foreign Trade", *Journal of Economic History*, Vol. 15, 1955.
- [22] Hinton, R. W. K., "The Mercantile System in the Time of Thomas Mun", *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. 7, 1955.
- [23] Holdsworth, W. S., *A History of English Law*, Vol. V, London: Methuen and Co., 1924, Vol. VIII, London, n. d.
- [24] Judges, A. V., "Philip Burlamachi: a Financier of the Thirty Years' War", *Economica*, VI, 1926, pp. 285-300.
- [25] Johnson, E. A., "Gerard de Malynes and the Theory of the Foreign Exchanges", *American Economic Review*, Vol. 13, 1933.
- [26] Johnson, R. A. *Predecessors of Adam Smith*, New York, 1937.
- [27] Kirk, R. E. and Kirk, E. F., *Returns of Aliens Dwelling in the City and Suburbs of London*, Vol. 2, Aberdeen, 1900-08.
- [28] Letwin, W., *The Origins of Scientific Economics*, London, 1963.
- [29] Malynes, Gerrard de, *Saint George for England: Allegorically Described*, 1601.
- [30] Malynes, Gerrard de, *The Canker of England's Commonwealth*, 1601.
- [31] Malynes, Gerrard de, *Englands View, in the Unmasking of Two Paradoxes*, 1603.
- [32] Malyned, Gerrard de, *The Maintenance of Free Trade*, 1622.

- [33] Malynes, Gerrard de, *The Center of the Circle of Commerce*, 1623.
- [34] Malynes, Gerrard de, *Lex Mercatoria*, 1st ed., 1622.
- [35] Malynes, Gerrard de, *manuscript*, "Treatise of Tripartite Exchange", 1610.
- [36] Malynes, Gerrard de, *manuscript*, "A Treatise of the Royal Merchant of Great Britain", 1610.
- [37] Malynes, Gerrard de, "Treatise of Tripartite Exchange", British Museum, Harl. MS 513.
- [38] McCulloch, J. R., *Old and Scarce Tracts on Money*, London, 1856.
- [39] Milles, Thomas, *The Customers Replie*, London, 1604.
- [40] Mints, L. W., *A History of Banking Theory in Great Britain and the United States*, Chicago: University of Chicago Press, 1954.
- [41] Misselden, Edward, *Free Trade, or the Meanes to Make Trade Florish*, London, 1622.
- [42] Misselden, Edward, *The Circle of Commerce or the Ballance of Trade*, London, 1623.
- [43] Muchmore, L., "Gerrard de Malynes and Mercantile Economics", *History of Political Economy*, Vol. 1, No. 2, Fall 1969.
- [44] Reich, Henry, *Rymer's Foedera*, Vol. 18, 1627.
- [45] Richards, R. D., *The Early History of Banking in England*, London: P. S. King and Son, Ltd., 1929.
- [46] Roberts, Lewes, *The Merchant's Mappe of Commerce*, London, 1638.
- [47] Royal Commission on Historical Manuscript, *Calendar of the Manuscripts of the Most Hon. Marquis of Salisbury*, Part 4, London, 1892.
- [48] *Salisbury Manuscripts*, London, 6, 1895.; 8, 1899.;
- [49] Salzman, L. F., *English Trade in the Middle Ages*, Oxford: Clarendon Press, 1931.
- [50] Shaw, W. A., *The History of Currency, 1252 to 1894*, London, 1896.
- [51] *State Papers Domestic*, Eliz I.; Charls I.
- [52] Stone, L., *An Elizabethan: Sir Horatio Palavicino*, Oxford, 1956.
- [53] Supple, B. E., "Currency and Commerce in the Early Seventeenth Century", *Economic History Review*, 2nd ser., Vol. 10, 1957.
- [54] Supple, B. E., "Thomas Mun and the Commercial Crisis, 1623", *Bulletin of the Institute of Historical Research*, Vol. 27, 1954.
- [55] Supple, B. E., "An Elizabethan: Sir Horatio Palavicino", *Explorations in Entrepreneurial History*, Vol. 9, 1956.

- [56] Supple, B. E., *Commercial Crisis and Change in England, 1600-1942*, Cambridge Univ. Press, 1959.
- [57] Tawney, R. H., Introduction to Wilson's, *Discourse*, 1925.
- [58] Usher, A. P., *The Early History of Deposit Banking in Mediterranean Europe*, Vol. I, Harvard Economic Studies, Vol. LXXV, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1943.
- [59] Vaughan, Rice, *Discourse of Coin and Coinage*, London, 1675.
- [60] Wallerstein, I., *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*, Academic Press, 1974.; 邦訳, 川北稔訳, 『近代世界システム…農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立…』, I, II, 岩波現代選書, 1981年。
- [61] Wilson, Thomas, *A Discourse upon Usury*, 1572, with an Historical Introduction by R. H. Tawney, New York: Harcourt, Brace, 1925.